

『文心雕龍』卷一原道に「心生而言立。言立而文明。自然之道也」と謂う。言葉は内なる経験のおのずからなる発露であり、文はその自然の象徴と解して良いであろう。然しながら、語ることや書くことは常にはそのように自然ではない。感性や思惟の深みが自らを託した文字に満たされぬ憾みを遺すこともあるうし、文字が自己の出自の正しさを疑うべき場合もある。そして恐らく後者の場合が極めて多い。

定家は俊成の言葉として「心を本として詞を取捨せよ」(『毎月抄』)を伝えるが、その定家にしても『後鳥羽院御口傳』によって「心あるやうなるを庶幾せず」と批判されている。その批判の是非は暫く措くとしても、心と詞とが相応することはなかなか難しいと言わねばならない。この心と詞の相応は無論やまと哥の道のことにも留まらない。心は広義には思惟の経験、あるいは何程かの真理の体験と言い換えることができる。詞への憾みが残れば、新たな時熟を期して「実存の美しき渾沌」(ニーチェ)のうちに沈黙するに若くはないし、もし後鳥羽院の言う「正躰なき事」になり果てるのであれば、形姿のみを追って「うつくしくいひつづけ」ることは殆んど無益でありかつ有害である。語することも書くこともそれ故心と詞との相応の或いは学問研究の厳密性のそして自己自身の同一性の検証となるであろう。

定められた研究室予算の中より研究紀要を刊行しうることは、そこに発表の機会を得る者にとって他を顧みるまでもなく望外の幸福である。しかしそれが望外のものであり恵まれたものである程、研究者としての自覚と責任が強く要求される。本紀要のために十指に余る論考が寄せられた。恐らくは——、その各々のうちに相応の緊張と自己検証の努力が秘められているであろうし、またそうでなくてはならない筈である。

提出された論文は主題も素材も或いは論述の仕方も極めて多様である。その多様性は確かに美学研究の豊かな広表

を示すものではあるが、反面において美学の定義の動揺をも物語っているであろう。編集の責を負う者（佐々木・藤田）としては然し各研究の個性や多様性を可能な限り尊重した。これらの多様な途がやがては美学の根本理念へと求心的に収斂してゆくことを、そしてまたかかる発表を契機として更に新たなる思惟の展開と実りある学問的交流が生起することを心より願いつつ、関係各位への深い謝意と自戒の念を籠めて、爰に研究紀要第一号を送り出した。大方の斧正を乞う次第である。

昭和五十九年三月二日

藤 田 一 美